

「阿波の狸合戦」諸写本の比較考察

森脇佳代子*

要旨：本稿では、江戸期から明治期にかけての「阿波の狸合戦」写本6種と関連書籍を調査・比較し、「阿波の狸合戦」が成立期前後において、どのような形だったのか、またどのような地域文化の中でそれらが普及していったのかを考察した。

キーワード：阿波の狸合戦、阿波狸合戦、金長、写本、書本、貸本、民話、講談

1. はじめに

小松島市のシンボルとして挙げられる代表的なもの一つに「阿波の狸合戦」がある。

「金長」と呼ばれる小松島の狸が主役であり、報恩譚と狸同士の合戦を組み合わせた天保年間（1830～1844）の話である。一般的に民話として扱われることが多いが、時系列に追っていくと、写本（書本）、講談、講談速記本¹⁾、実写映画²⁾、アニメ映画³⁾、小説、町おこし⁴⁾など様々な媒体を経由しながら一般に認知されてきたことがわかる⁵⁾。

「阿波の狸合戦」に関する先行研究としては高橋（2000a, 2000b）が挙げられる。

しかし、これらの研究は主に講談速記本、民話集

に収録されているもの以降が対象となっており、それ以前にすでに徳島に存在していたとみられる写本の検討はほとんどなされてこなかった。とはいっても、写本についての研究がないわけではない⁶⁾。

横谷（1996）は江戸末期に成立したとみられる『古狸金長義勇珍説』翻刻の解題の中で「明治以前、最も早い時期に『阿波狸合戦』が文字になったと思われるのは、次の三つの諸本である。」⁷⁾として『古狸金長義勇珍説』『近頃古狸珍説』『金長一生記』の3つを挙げている。

現在、「阿波の狸合戦」写本として確認できるものは、表1の6種である⁸⁾。

本稿では、これら「阿波の狸合戦」写本6種を調査・比較し、各写本の共通点と差異、また写本ごと

表1 「阿波の狸合戦」写本

	種別	所蔵		所蔵先書名	構成
a	金長一生記	四国大学附属図書館	凌霄文庫	「金長一生記」	全1冊
b	近頃古狸珍説	徳島県立図書館	森文庫	「近頃古狸珍説 義、礼、智、信」	全5冊中4冊 (最初の1冊欠巻)
c	近頃古狸珍説	徳島県立図書館	岩村武勇文庫	「近頃古狸珍説」	全5冊
d	近頃古狸珍説	関西大学図書館		「近頃古狸珍説10巻」	全5冊
e	古狸金長義勇珍説	徳島県立図書館	森文庫	「古狸金長義勇珍説」	全2冊中1冊 (乾のみ)
f	古狸金長義勇珍説	四国大学附属図書館	凌霄文庫	「古狸金長義勇珍説」	全1冊(乾・坤)

* 〒773-0001 小松島市小松島町新港9-19 小松島市文化財保護審議会（小松島市教育委員会生涯学習課）

の特徴を明らかにしたい。さらに関連する写本を調査し、「阿波の狸合戦」成立期前後の徳島がどのような文化環境にあったのか考察を試みた。

2. 写本ごとの概略

1) 金長一生記 (a)

a. 凌霄文庫本

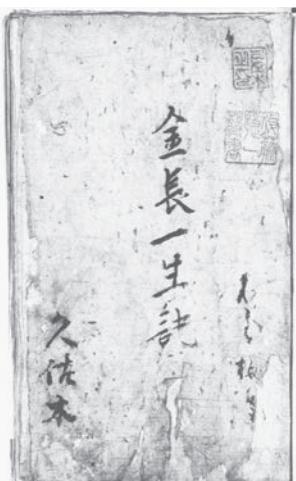


写真1 「金長一生記」表紙
(四国大学附属図書館
凌霄文庫蔵) (a)

『金長一生記』だけは、卷頭の目録がない（写真2）（卷頭には無いが「第一之卷」以外は各話頭に小タイトルが書かれている）。「第一之卷」から「第八之卷」の八話にわかっている。

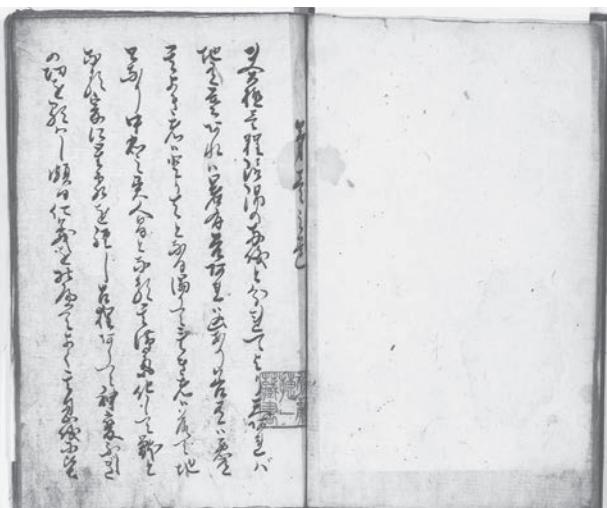


写真2 「金長一生記」(四国大学附属図書館 凌霄文庫蔵) (a)

2) 近頃古狸珍説 (b ~ d)

b. 森文庫本

現在、徳島県立図書館に保管されている森文庫のものは『義』『礼』『智』『信』の四冊（写真3）。

『義』には「三四」、『礼』には「五六」、『智』に



写真3 「近頃古狸珍説 義, 礼, 智, 信」表紙 (徳島県立図書館 森文庫蔵) (b)

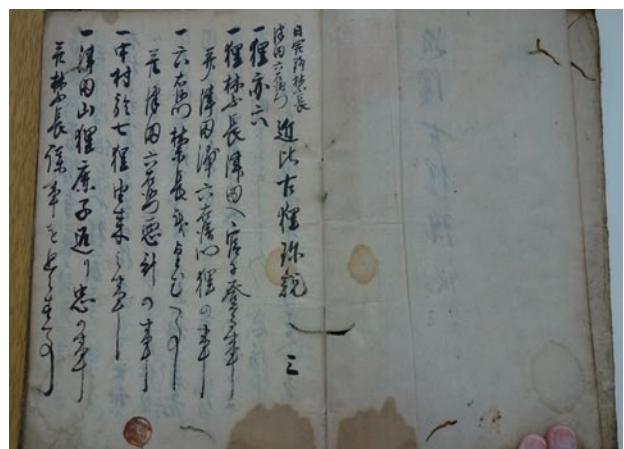


写真4 「近頃古狸珍説 義, 礼, 智, 信」「義」の目録部分
(徳島県立図書館 森文庫蔵) (b)

は「七八」、『信』には「九十」と書かれており、「一二」にあたる最初の一冊が欠巻しているものと見られる。もともとは全五冊だったのだろう。義、礼、智、信と書かれているのは『近頃古狸珍説』3種の中でもこの森文庫本だけである。

目録に書いてあるタイトルに該当する本文が見当たらないなど、内容としては未完である。写し忘れというよりは、推敲途中、もしくは下書きのような印象を受ける。

また、『義』「三」目録部分に「日開野禁長／津田六右衛門」と並記された下に「近頃古狸珍説」と書かれており（写真4）、『古狸金長義勇珍説』『金長一生記』が本のタイトルに「金長」を入れて明確に金長を主人公に据えているのに対し、当本は金長（禁長）と六右衛門を同列に扱っている。

各巻、徳島県立図書館蔵書印、森文庫蔵書印とは別の丸印（判読不能）が確認できる。

たけ お
c. 岩村武勇文庫本



写真5 「近頃古狸珍説」表紙 (徳島県立図書館 岩村武勇文庫蔵) (c)

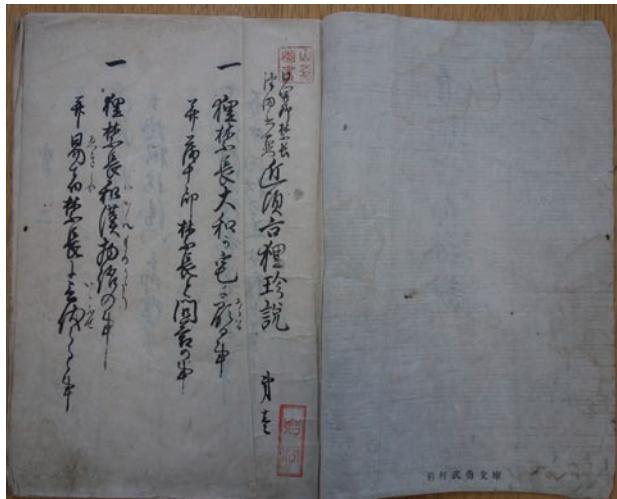


写真6 「近頃古狸珍説 一二」の目録部分 (徳島県立図書館 岩村武勇文庫蔵) (c)

五冊一組。各巻表紙に「五冊之内」(「一二」のみ「総五冊」と)と「山本」と肉筆で記入がある(写真5)。

当本は最初の一冊目である「近頃古狸珍説一二」の最初の頁、第一の目録部分の「近頃古狸珍説」の上に「日開野禁長／津田六右衛門」が並記されている(写真6)。

d. 関西大学図書館本

五冊一組。表紙は水色(藍による着色と考えられる)のチェック模様で、「古狸珍説」の題簽だいせんが貼られている(写真7)。最初の一冊(「一二」)のみ、右側にも「五冊 狸珍説」と書かれた別の題簽が貼られている。また、二冊目(「三四」)の表紙に「通町一丁目」、三冊目(「五六」)の裏表紙見返しに「久吉」「阿州徳」と手書きで記入されている。

各巻表紙裏に「軍書 貸本所 徳島二軒屋町 藤原屋義之助」の黒印があり(写真8)、貸本であったことがわかる。最終巻である「九十」の裏表紙見返しにのみ、「本 徳島三倉屋町藍屋萬兵衛」の印が押してある(写真9, 10)。(三倉屋町は現徳島市西新町)



写真7 「近頃古狸珍説」表紙 (関西大学図書館蔵) (d)

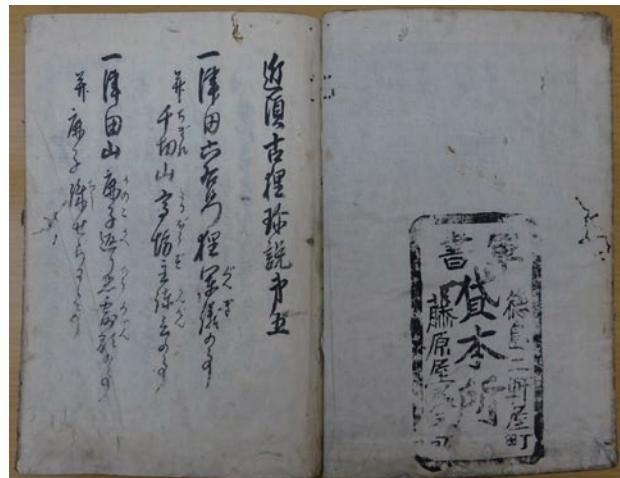


写真8 「近頃古狸珍説 五六」表紙見返し (関西大学図書館蔵) (d)

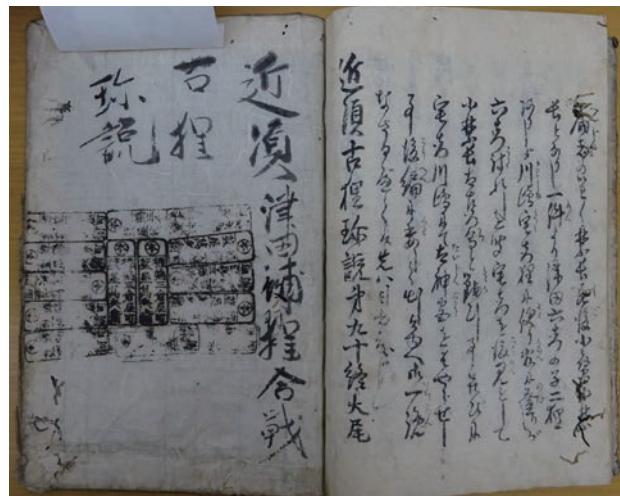


写真9 「近頃古狸珍説 九十」裏表紙見返し (関西大学図書館蔵) (d)



写真10 「近頃古狸珍説 九十」印の拡大 (関西大学図書館蔵) (d)

3) 古狸金長義勇珍説

e. 森文庫本

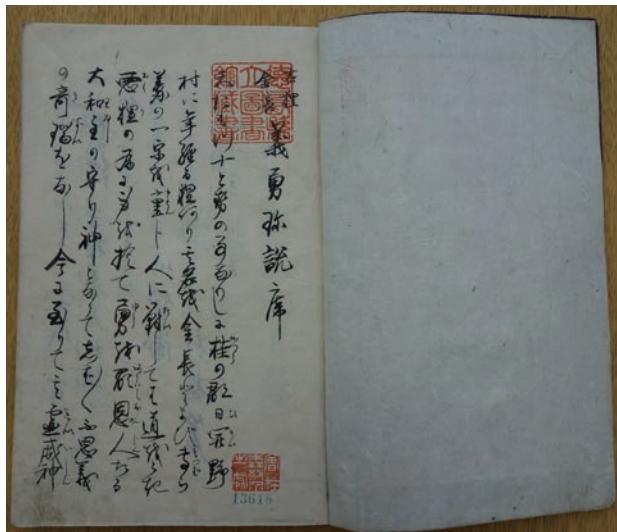


写真11 「古狸金長義勇珍説」(徳島県立図書館 森文庫蔵) (e)

「乾」「坤」(上下巻)のうち、徳島県立図書館に現在保管されているものは「乾」(上巻)のみである。

文字の書き方より、f. 凌霄文庫本の『古狸金長義勇珍説』より古い時代に筆写されたものと見られる。江戸時代後期筆写か。

「序」を「席」と誤写している(写真11)。

f. 凌霄文庫本

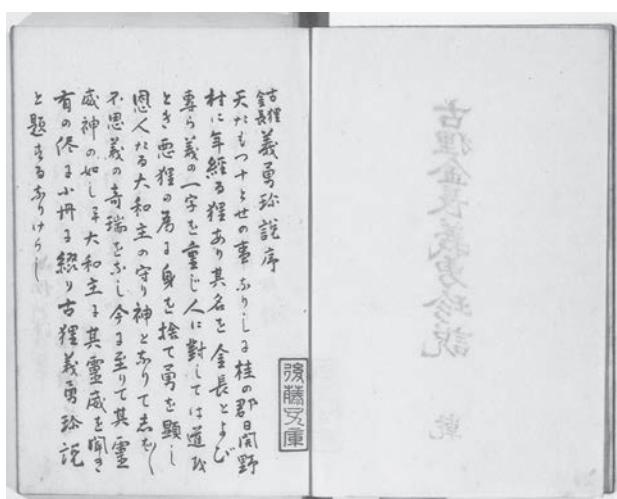


写真12 「古狸金長義勇珍説」(四国大学附属図書館 凌霄文庫蔵) (f)

「乾」「坤」とわかれてはいるが全一冊。変体仮名の割合が少なく、ひらがな表記が現行のもの(明治33年の小学校令で一音一字に統一)にかなり近いことなどから、明治以降に筆写された可能

性が高い。

森文庫の同本(e)で「席」と誤写されていた部分は、正しく「序」と写されている(写真12)。ただ、こちらの方が写された時代が後になると思われるため、森文庫のもの(e)、凌霄文庫のもの(f)とは別に、原本にあたる本が存在していたと考えられる。そのため、『古狸金長義勇珍説』は、e. 森文庫本、f. 凌霄文庫本、この2種以外の原本、と少なくとも3種は存在していたことが推測できる。

『古狸金長義勇珍説』(e. 森文庫本、f. 凌霄文庫本とも)にのみ、『近頃古狸珍説』『金長一生記』には存在しない「序」がある。「序」の部分に「小松の浦 松樹著」「天保十年仲夏」とあり、著者名、成立年が確認できる。

しかし、「小松の浦 松樹」が誰であったのか、詳しいことは不明である。「小松の浦」から「小松島浦」に住んでいた人物だろうと考えられる。一方、「天保十年仲夏」についても疑わしい。本文中に、金長が官位をもらうため穴観音に向かった時期として「天保十年子四月の末」(e. 森文庫本・f. 凌霄文庫本とも)という年月が書かれているが、天保十年は亥年であり、子年ではない。

比べて『金長一生記』(a)では「天保十一年子四月の末」とあり、こちらは整合性がとれている(天保十一年が子年)。

ここから『古狸金長義勇珍説』(e. 森文庫本、f. 凌霄文庫本)は、もともと「天保十一年子」と書かれていたものを筆写する際に「一」を写し忘れた可能性が高い。実際は天保十年より後に筆写したと考えられる。

ちなみに『近頃古狸珍説』についても、本文中に「天保十年亥」の記述があり、年と干支の不整合は見られない。

『金長一生記』と『近頃古狸珍説』については、著者名、成立年の記載はない。

3. 写本3種(『金長一生記』『近頃古狸珍説』『古狸金長義勇珍説』)の内容における共通点と差異

1) 写本3種の共通点

全て手書きの写本(書本)である。また『金長一

生記』『近頃古狸珍説』『古狸金長義勇珍説』3種とも話の流れはほぼ同様である。

①大和屋の話→②宮倉の易者（売卜）の話→③高洲（須）（渕）の院（隠）元（狸）が卯吉（宇吉・歌吉）をだます話（狸にだまされ坊主になった男の話）→④火の玉（狸）が婆をだまし損ねた話→⑤金長が津田の六右衛門のところに修行に行く→⑥六右衛門は優秀な金長を跡継ぎにのぞむが、金長はそれを断る。自分の配下に下らぬ金長に脅威に感じた六右衛門は金長の命を狙い夜討を計画する→⑦六右衛門の部下・鹿の子（狸）が金長にそれを密告し、金長は逃げるが、股肱の臣だった鷹（狸）は夜討の場で殺される→⑧津田方軍議、千切山高坊主が六右衛門に諫言→⑨密告が露見した鹿の子（狸）も六右衛門に呼び出され殺される→⑩金長は小松島に戻り、軍議を開き、味方を集め→⑪鹿の子の妻である小鹿の子（狸）が夫の仇討ちのため金長に加勢する→⑫津田浜で狸合戦→⑬小鷹（狸）・熊鷹（狸）兄弟が父鷹（狸）の仇、作右衛門（狸）を討つ。

この後、『金長一生記』以外の本では、六右衛門が穴觀音に逃げ帰り、それを日開野方が追い詰め、最後は六右衛門を討つ話が続く。次頁に表2「阿波の狸合戦」写本 目録・小タイトル比較表を掲載する。

上記の①～⑬も表中に書き入れた。詳細な言い回しは各本によって異なるが、大筋は同じであることが確認できる。

いずれも本文中に「楠公」や「楠木正成」、「会稽に恥辱を雪ぎし」、「立車に向ふ蠍螂の斧」など軍記物を意識した記述が見られる。

2) 写本3種の差異・各本の特徴

一方、写本によって異なる部分もある。一番大きく異なるのは登場人物名・狸名が異なる点である。こちらについては表3にまとめた。

以下、写本ごとの特徴を述べる。

『金長一生記』(a)に関しては、他2種（『近頃古狸珍説』『古狸金長義勇珍説』）と異なり、仇役である六右衛門は死がない。他2種が、日開野（金長）方が六右衛門の首を討ち取り、仇討ちを完遂するところまで書き切るのに対し、その最後の部分が欠落している。

『近頃古狸珍説』(b～d)の特徴としては、貸本であったことが挙げられる。中でもd. 関西大学図書館本は貸本屋印がはっきりと確認でき（写真8）、複数の店舗、人の手をわたっていたことが書き込みや印から推測できる。

b～dとも、最終巻の最後に、「篇者のいわく禁長死後小鷹小禁長となりし一件より津田六右衛門の子二鷹ありしが川嶋宅右衛門狸に便り官に登りしが六右衛門討れしを聞宅右衛門を後見として小禁長太左衛門等と戦ひし事並びに宅右衛門川嶋にて太神宮をはやらせし事後篇に委しく出し候ゆへ御一覧なさるべく候先は目出度し也」(d. 関西大学図書館本)（他、b. 森文庫本、c. 岩村武勇文庫本ともに細かな言い回しは異なるものの、ほぼ同じ内容が書かれている。）とあり、明確に貸本の読み手を意識した記述が見られる。

また貸本ゆえか『近頃古狸珍説』では「恐々謹言」をもじって「コンコン謹言」という駄洒落を挿入したりと、ユーモラスな一面も見られる(c, dにのみ記載)。

さらに最初の一冊（「一二」）の最後に挿入されている麦の穂の話は、この『近頃古狸珍説』だけに見られるオリジナルの話である(c, dにのみ記載)。

『古狸金長義勇珍説』(e, f)の特徴としては、前章で述べた「序」の存在が挙げられる。序では金長の義勇と「今に至りて其靈威神の如し」と靈威が略述されている。最終章では金長の祠の祭祀に関して（萬吉にとりついた）金長がかなり詳しく述べるシーンが挿入され、また最後は序と対応するように「大和の門前」にある「金長靈明神の社」についての説明で締めくくられている。このように狸信仰を話の着地点としている点が他2種の写本とは異なっている。

4. 「阿波の狸合戦」写本の周辺

狸が主人公であり、擬人化されたキャラクターとして合戦を行うという設定は「十二類絵巻」や「けだものたいへいき」に見られる。「阿波の狸合戦」もこうした異類合戦物の一つとして捉えることもできよう。

一方、徳島の不思議な話を集めた写本としては、

表2 「阿波の狸合戦」写本 目録・小タイトル比較表

	a. 金長一生記	b. 近頃古狸珍説	c. 近頃古狸珍説
所蔵	四国大学附属図書館（凌霄文庫）	徳島県立図書館（森文庫）	徳島県立図書館（岩村武勇文庫）
目 録 ・ 小 タ イ ト ル	<p>第二金長當家万吉ニ移り物語り事①</p> <p>第三宮倉易者金長に云伏らるゝ事② 付たり高須院元小松嶋卯吉を計ル事③ 火の玉狸天狗祖母をおどさんと仕る事④</p> <p>第四金長津田へ官に登る事⑤ 并二津田六右衛門狸の事 正一位六右衛門金長を望む事 六右衛門悪計謀儀の事⑥</p> <p>第五津田山鹿の子狸返り忠之事 藤の樹寺鷹討死之事 并二川嶋作右衛門勇猛之事⑦</p> <p>第六の巻 一 津田大将六右衛門軍議之事 并千切山高防諫言之事⑧ 一 川嶋九左衛門高防の諫をくしく事 一 津田山鹿の子誅たるゝ事 并二小鹿の子愁憲之事⑨</p> <p>(第七に該当) 金長帰村して物語りの事 鎮守堂にて軍儀之事⑩ 津田山鹿の子日開野へ来る事 金長津田へ出張之事⑪</p> <p>第八之巻 津田六右衛門出張之事并二衛門三郎狸勇之事⑫ 濱手合戦津田方敗北之事金長自六右衛門戦事 小鷺兄弟親の敵を討手金長小鷺に利をとく事⑬</p>	<p>(?) (一二) [欠巻]</p> <p>(義) (三四) [25丁] — 狸亦六 — 狸禁長津田へ官に登る事 并津田浦六右衛門狸の事⑤ — 六右衛門禁長を望む事 并津田六右衛門悪計の事⑥ — 中村於七狸由来之事 — 津田山狸鹿子返り忠の事 并禁長謀事を廻らす事⑦ — 曰開野藤樹寺鷹討死の事 并川嶋作右衛門狸武勇の事⑦</p> <p>(禮) (五六) [20丁] — 津田六右衛門狸軍義の事 并千切山高坊主諫言の事⑧ — 津田山鹿子返り忠の事 并鹿子誅せらるゝ事⑨ — 曰開野鎮守堂にて軍儀の事 并二高須院元妙策を述る事⑩ — 津田山小鹿子日開野へ来る事 并禁長千代ヶ丸へ出張の事⑪</p> <p>(智) (第七) [16丁] — 津田方濱手へ出張の事 并中田衛門狸武勇の事⑫ — 津田濱手にて狸合戦の事 并高坊主討死の事</p> <p>(智) (第八) — 禁長六右衛門合戦の事 并川嶋作右衛門勇猛の事 — 小鷺熊鷺敵作右衛門を討事 并禁長小鷺に利害を説事⑬</p> <p>(信) (第九) [17丁] — 津田濱手合戦の事 并八兵衛狸駆きの事 — 衛門三郎九左衛門狸を討事 并二八衛狸最期の事</p> <p>(信) (第十) — 六右衛門狸穴観音へ逃入事 并小鹿子夫の敵を討事 — 禁長深手を負ふ日開野へ帰る事 并小鷺二代の禁長と成る事</p>	<p>(第壱) [29丁] — 狸禁長大和か宅に顕る事 并茂十郎禁長と問答の事① — 狸禁長和漢物語の事 并易者禁長に云伏らるゝ事②</p> <p>(第二) — 近郷の狸顕名の事 并地獄橋衛門三郎狸の事 — 高須院元狸歌吉を欺く事③④ 并中田松の木女狸の事</p> <p>(第三) [27丁] — 狸禁長津田へ官に登る事 并津田浦六右衛門狸の事⑤ — 六右衛門禁長を望む事 并津田六右衛門悪計の事⑥</p> <p>(第四) — 津田山鹿子狸返り忠の事 并禁長謀事を廻らす事⑦ — 曰開野藤樹寺鷹討死の事 并川嶋作右衛門狸武勇の事⑦</p> <p>(第五) [22丁] — 津田六右衛門狸軍儀の事 并千切山高坊主諫言の事⑧ — 津田山鹿子狸返り忠露顕の事 并鹿子誅せらるゝ事⑨</p> <p>(第六) — 曰開野鎮守堂にて軍評義の事 并高須院元妙策を述る事⑩ — 津田山小鹿子日開野へ来る事 并禁長千代ヶ丸へ出勢の事⑪</p> <p>(第七) [19丁] — 津田方濱手へ出張の事 并中田衛門狸武勇の事⑫ — 津田濱手にて狸合戦の事 并高坊主討死の事</p> <p>(第八) — 禁長六右衛門合戦の事 并川嶋作右衛門勇猛の事 — 小鷺熊鷺敵作右衛門討事 并禁長小鷺に利害を説事⑬</p> <p>(第九) [18丁] — 津田濱手合戦の事 并八兵衛狸討死の事 — 衛門三郎九左衛門狸を討事 并衛門三郎最期の事</p> <p>(第十) — 六右衛門狸穴観音へ逃入事 并小鹿子夫の敵六右衛門を討事 — 禁長深手を負ふ日開野へ帰事 并小鷺二代の禁長となる事</p>

*最初の巻の巻頭に書かれているタイトル名と各巻本文前に書かれているタイトル名が異なる場合、最初の巻の巻頭に書かれているタイトル名を優先した
※〔〕は本文の丁数。丁数は表紙・中表紙・遊紙を除く

d. 近頃古狸珍説	e. 古狸金長義勇珍説	f. 古狸金長義勇珍説
関西大学図書館	徳島県立図書館（森文庫）	四国大学附属図書館（凌霄文庫）
(第一) [29丁] 〔※裏表紙裏の本文書込頁を含むと30丁〕 — 狸禁長大和が宅に顕るゝ事 并茂十郎禁長と問答の事① — 禁長和漢物語の事 并易者禁長に云伏らるゝ事②	(乾) [50丁] — 大和茂十郎由緒の事 并金長狸の事① — 金長大和の弟子萬吉に 移りてむかし物語りの事① — 宮倉の売ト金長に云伏らるゝ事②	(乾) [47丁] — 大和茂十郎由緒の事 并金長狸の事① — 金長大和の弟子萬吉に移りてむかし物語 りの事① — 宮倉の売ト金長に云伏らるゝ事②
(第二) — 近郷の狸顕名の事 并地獄橋衛門三郎狸の事 — 高須院元狸歌吉を欺く事③④ 并中田松の木女狸の事	— 近郷の狸に名ある咄の事 并高洲院元卯吉を欺く事③④	— 近江の狸に名ある咄の事 并高洲院元卯吉を欺く事③④
(第三) [29丁] — 狸禁長津田へ官に昇る事 并津田浦六右衛門狸の事⑤ — 六右衛門禁長を望む事 并津田六右衛門悪計の事⑥	— 金長津田へ官に昇る事 并津田浦六右衛門狸の事⑤⑥	— 金長津田へ官に昇る事 并津田浦六右衛門狸の事⑤⑥
(第四) — 津田山鹿子狸返り忠の事 并禁長謀事を廻らす事⑦ — 日開野藤樹寺鷹討死の事 并川嶋の作右衛門狸武勇の事⑦	— 津田山鹿子狸内通の事 并金長謀事を廻らす事⑦	— 津田山鹿子狸内通の事 并金長謀事を廻らす事⑦
(第五) [21丁] — 津田六右衛門狸軍儀の事 并千切山高坊主諫言の事⑧ — 津田山鹿子狸返り忠露顎之事 并鹿子誅せらるゝ事⑨	(坤) [欠巻]	(坤) [38丁] — 津田浦六右衛門狸軍儀の事 并千切山高坊主諫言の事⑧⑨
(第六) — 日開野鎮守堂にて軍評儀の事 并高須院元妙策を述る事⑩ — 津田山小鹿子日開野へ来る事 并禁長千代ヶ丸へ出勢の事⑪		— 金長梅山が方へ帰る事 并鎮守堂にて軍評定の事⑩ — 津田山小鹿子日開野へ来る事 并金長津田へ出張の事⑪
(第七) [18丁] 〔※裏表紙裏の本文書込頁を含むと19丁〕 — 津田方濱手へ出張の事 并中田衛門狸武勇の事⑫ — 津田濱手にて狸合戦の事 并高坊主討死の事		— 津田濱狸合戦の事 并衛門三郎勇猛の事⑫
(第八) — 禁長六右衛門合戦の事 并川嶋作右衛門勇猛の事 — 小鷹熊鷹敵作右衛門討事 并禁長小鷹に利を説事⑬		— 金長六右衛門と戦ふ事 并小鷹兄弟作右衛門を討事⑬
(第九) [17丁] — 津田濱狸血戦の事 并八兵衛狸討死の事 — 衛門三郎九左衛門狸を討事 并衛門三郎最期の事		
(第十) — 六右衛門狸穴観音へ逃込事 并小鹿子夫の敵を討事 — 禁長深手を負ひて日開野へ帰る事 并小鷹二代の禁長となる事		— 六右衛門穴観音へ逃入る事 并小鹿子夫の敵を討事 — 金長帰村して最期の事 并祠建立の事

表3 「阿波の狸合戦」写本・関連書籍 登場人物名・狸名比較表

		成立年代	金長	紺屋の主人	紺屋の丁稚 金長に取り憑かれる	修驗者、法印	火の玉狸が化かしそ なつた男 狸にだまされ坊主に こなつた婆	南方の総大将	六右衛門の娘	庚申の新八
〔阿波の狸合戦〕 写本	(a) 金長一生記	江戸後期か	金長	大和屋（梅山） 梅屋勘兵衛 茂右衛門	万吉	宮倉易者 法印	卯吉 宇吉	お八 婆母 天狗婆母	田浦嘉左衛門	登場せず （六右衛門方として）
	(b・d) 近頃古狸珍説	江戸後期か	禁長	大和（梅山） 茂十郎	千太郎	法印	歌吉	婆々 天狗婆々	田浦太左衛門	千切山高坊主の提案の中に「大 将の姫君」と出てくるのみ
	(e・f) 古狸金長義勇珍説	江戸後期か (天保十年仲夏?)	金長	大和（梅山） 茂十郎	萬吉	宮倉の売卜 宮倉の易者 修驗者 法印	卯吉（タイトル） 宇兵衛（本文） 祖母 天狗祖母	田浦嘉左衛門	登場せず	（金長方として）
関連写本	阿波百物語	明治三十六年 (1903)	金長	大和屋茂右衛門	亀吉	梅花堂法印 八卦觀	宇吉	お虎	田浦太左衛門	庚申新八
〔阿波の狸合戦〕 講談速記本	実説古狸合戦 津田浦大決戦 日開野弔合戦	明治四十三年 (1910)	金長	大和屋茂右衛門	龜吉	梅花堂法印 八卦觀	歌吉	お虎	田浦太左衛門	庚申の新八 (金長方として)

『燈下録』(1812), 『阿州奇事雑話』(寛政年間・1789~1801頃)⁹⁾, 明治時代まで下るが, 『阿波百物語』(1903) (すべて徳島県立図書館蔵) 等が知られる。いずれも講談速記本が刊行(1910)される前に書かれたもので、狸合戦の話自体は入っていないが、「阿波の狸合戦」が講談として広まる前の、徳島における狸の話の状況を読み取ることができる。

もっとも注目すべきは、『阿波百物語』における以下の記述である。

「この阿波といふ国は昔から狸の本場で、あの狸合戦の書本を読だお方は随分強い狸奴があつたことをお知りでしやふ」(「北島藤右衛庚申新八を討つ」『阿波百物語』卷之二)

当本は明治36年成立¹⁰⁾で講談速記本刊行前の本であり、その時点で「阿波の狸合戦」の話が書本という形で一般に広く知られていたことがわかる。

『阿波百物語』には、「北島藤右衛庚申新八を討つ」「狸と狐の知恵くらべ」「小松島水越古狸の怪戯」など狸の話が多くおさめられている¹¹⁾。庚申新八は『近頃古狸珍説』中に津田(六右衛門)方の援軍として名前が出ており、後に続く「阿波の狸合戦」講談では金長方の重要登場人物として活躍する狸である。また「狸と狐の知恵くらべ」では「六右衛門」狸が登場している。「小松島水越古狸の怪戯」に関しては表2の③とほぼ同話である。(ただしこちらは「天保十二年九月頃の事なりき」とあり、だまされた男の名は「宇吉」である)

一方、木下(2013)が『阿波百物語』と「相当数に同話関係が認められる」「きわめて同文性が強い」¹²⁾と指摘している『燈下録』にはほとんど狸が登場しない¹³⁾。現在であれば狸と結びつけられるであろう津田・千切山の鬼火・妖怪、沖ノ洲浦の舟幽霊の話¹⁴⁾も、狸との結びつけは見られない。

両者の書物としての性質の違い¹⁵⁾もあるだろうが、『燈下録』が書かれた時点の徳島では、「不思議・不可解な事象を他地域と比べて顕著に狸と結びつける傾向」はほぼなかったと考えるのが妥当だろう。

『阿州奇事雑話』に関しては「狸脇指」の話がよく知られている。人に化けた狸と軍記物が接点を持つという点では「阿波の狸合戦」に通じるものがある。また「此類の地蔵又は古き墓等に狸の因て或は

病を直し色々と一旦奇験を顯し、世に流行仏とて參詣群集をなす事」¹⁶⁾の記述から、この時点で徳島において狸信仰が存在したことわかる¹⁷⁾。ただし、当本においても狸の話が特別多いわけではない¹⁸⁾。

「この阿波といふ国は昔から狸の本場」という概念は、これら(『阿州奇事雑話』『燈下録』)の成立以降に発生したものと考えられる。

5. おわりに

以上、現在確認可能な写本6種(a~f)の比較考察と関連書籍の調査を行った。

写本6種とも大きな話の流れは共通している一方、写本の種別ごとに構成や話の見せ方、登場人物名・狸名が異なっていることがわかった。

『金長一生記』をベースに考えた場合、『近頃古狸珍説』は五冊にわけた構成をとり、読み物として貸本の読み手を意識したアレンジが加えられていた。一方『古狸金長義勇珍説』は乾坤と二つにわけた構成をとり、狸信仰を話の着地点とする特徴を持つ。

また講談以前にも貸本(書本)の形態で、一般に「阿波の狸合戦」が認知されていたことがわかった。

『燈下録』、『阿州奇事雑話』が書かれた1800年前後の徳島において、狸信仰はすでに存在していたものの、狸の話自体はさほど多くなかった。しかし狸合戦の写本が成立したと見られる江戸後期を挟んで、明治36年時点では「阿波といふ国は昔から狸の本場」という概念が成り立つほど、狸の話が他地域と比べて多くなっている。「阿波の狸合戦」成立期前後は、徳島においてちょうど狸の話が存在感を増していく時期であり、県域全体の狸の話と「阿波の狸合戦」の流布が相互に影響しあっていたと考えられる。

註

- 1) 神田講演・丸山速記(1910)
- 2) 『阿波狸合戦』(1939) 新興キネマほか
- 3) 『平成狸合戦ばんばこ』(1994) スタジオジブリ
- 4) 「ふるさとカーニバル阿波の狸まつり」「祠めぐりオリエンテーリング」ほか
- 5) 森脇(2021)
- 6) 山上(1996)、横谷(1996)、中村(2008)、横山(2009)、森脇(2021)
- 7) 横谷(1996) 40頁

- 8) 実物を確認できるものは以上だが、『勝浦郡志』の中に『金長明神由来実記』という書物の名前が見え、同種の写本である可能性が考えられる。
- 9) 写本（徳島県立図書館蔵）には成立年・刊行年の記載はないが、阿波叢書刊行の際の附言に「寛政頃の人とは想像し得られます」とあり、また本文中（『阿波叢書 第1巻 阿州奇事雑話』28頁・102頁・121頁等）に「寛政九丁巳年」（1797）が「この原稿を執筆している現在」というニュアンスで繰り返し用いられているため、寛政年間頃に書かれたものと見なしして差し支えないと本稿筆者は判断した。
- 10) 木下（2012）18頁
- 11) 『阿波百物語』卷之一では11話中3話、卷之二では44話中10話に「狸」という単語が登場している。
- 12) 木下（2013）46頁
- 13) 『燈下録』全157話中「狸」という単語が出てくるのは「箸藏山」「変化松」の2話だけである。
- 14) 阿波郷土研究会・元木（1941）139～141頁、卷之七「鬼火」
- 15) 『燈下録』と『阿波百物語』には書物としての方向性の違い、作者の興味のベクトルの違いがある。
『燈下録』（文化9年・1812）は考古学、博物学、文化財学に近い内容（古墳や発掘された遺物、現在も文化財指定されている天然記念物や、珍しい岩石などの内容が多い）であるのに対し、『阿波百物語』（明治36年・1903）は怪談集である。
- 16) 阿波郷土研究会・横井（1936）108頁
- 17) 中村（2008）90～91頁
- 18) 『阿州奇事雑話』全107話中、狸の話は「狸脇指」「萩原狸守」の2話のみ。「狸」という単語が出てくる話を合わせても5話に限られる。

参考文献

阿波郷土研究会・元木蘆洲（1941）：『阿波叢書 第3巻 燈下

- 録』。
- 阿波郷土研究会・横井希純（1936）：『阿波叢書 第1巻 阿州奇事雑話』。
- 勝浦郡教育会編（1923）：『勝浦郡志』、中編343頁。
- 神田伯龍講演・丸山平次郎速記（1910）：『実説古狸合戦』『津田浦大決戦』『日開野弔合戦』中川玉成堂
- 木下資一（2012）：徳島県立図書館蔵『阿波百物語』卷一（解題・翻刻・略注）、近代、107、17～46頁。
- 木下資一（2013）：徳島県立図書館蔵『阿波百物語』卷二（解題・翻刻・略注）一第一話～第二〇話一、近代、109、45～84頁。
- 木下資一（2014）：徳島県立図書館蔵『阿波百物語』卷二（解題・翻刻・略注）一第二一話～第三九話（巻末話）一、近代、110、87～122頁。
- 小松島市役所編（1952）：『小松島市史 旧小松島町の巻』。
- 高橋晋一（2000a）：『徳島大学総合科学部文化人類学研究室報告 4 阿波の狸文化』徳島大学総合科学部文化人類学研究室（高橋晋一）。
- 高橋晋一（2000b）：「はなし」の社会的機能—阿波の狸話をめぐって—、世間話研究、10、234～235頁。
- 中村禎里（2008）：『動物たちの日本史』海鳴社、78～124頁。
- 森脇佳代子（2021）：阿波狸合戦と小松島、須藤茂樹編『小松島の歴史と文化—阿波地域文化の特質—』徳島県教育印刷、25～77頁。
- 山上里香（1996）：凌霄文庫蔵『金長一生記』翻刻、凌霄、3、22～39頁。
- 横谷佳代子（1996）：凌霄文庫蔵『古狸金長義勇珍説』翻刻、凌霄、3、40～62頁。
- 横山泰子（2009）：狸は戦い、舞い踊る 近代芸能における狸のイメージ、小松和彦編『妖怪文化研究の最前線』せりか書房、16～34頁。

A Comparative Study of Various Manuscripts of *Awa no Tanuki Gassen*

MORIWAKI Kayoko

* 9-19 Shinko, Komatsushima-cho, Komatsushima 773-0001, JAPAN

Proceedings of Awagakkai, No. 64 (2023), pp. 129–138.